

【開催概要】

国際シンポジウム「幻の「源氏物語絵巻」をもとめて・続」
二〇一三年七月二十八日（日）午後一時～午後六時
立教大学 池袋キャンパス 太刀川記念館三階 多目的ホール

◆第一部 報告の部

- ① 「源氏物語絵巻 桐壺」（個人蔵）について
吉川美穂（徳川美術館学芸部課長）
- ② 「源氏物語絵巻 葵」（個人蔵）について
松岡知華（京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）
- ③ プリコラージュという観点からみた盛安本
エステル・レジェリー・ボエル氏（フランス国立東洋言語文化
研究所准教授）
- ④ 近世初期の源氏学——九条家とその周縁の学問など——
海野圭介（国文学研究資料館准教授）

◆第二部 コメントの部

- ① 水谷隆之（立教大学文学部准教授）
- ② 佐野みどり（学習院大学文学部哲学科教授）
- ③ 五十嵐公一（兵庫県立歴史博物館学芸員）
- ④ 若杉準治（京都国立博物館名誉館員）

◆第三部 討議の部

稲本万里子（恵泉女学園大学人文学部教授）
鈴木 彰（立教大学文学部教授）
高岸 輝（東京大学大学院人文社会系研究科准教授）
高橋 亨（名古屋大学名誉教授）
メラニー・トレデー（ハイデルベルク大学美術史学部教授）
渡辺雅子（学習院大学招聘研究員）

司会 小嶋菜温子（立教大学文学部教授）

主催 立教大学日本学研究所

共催 立教大学日本文学会

文科省科研基盤研究（B）「幻の源氏物語絵巻の文化的意義」
プロジェクト

【発表要旨】

「源氏物語絵巻 桐壺」（個人蔵）について

吉川美穂

「源氏物語絵巻 桐壺」（個人蔵、以下、「本絵巻」と略称）は、画風
や装丁・寸法から、スベンサー本「帚木」、石山寺・スベンサー本「末
摘花」、個人蔵本「葵」、パーク本・ベルギー個人蔵本「賢木」などの幻

の「源氏物語絵巻」^ケと一連の作と考えられる絵巻である。

『源氏物語』第一帖「桐壺」の全文を書写し、詞書十八段・絵十五図の三巻で構成される。絵は十五場面と、源氏絵の先行作例と比較しても数が多く、華やかな宮中儀礼や通過儀礼の場面が選ばれつつも、桐壺更衣の葬儀、その死を悲しむ桐壺帝、あるいは源氏と藤壺の出会い等、死や恋愛を主題とした例をみない場面も絵画化され、特異な輝きを放っている。

下巻にある奥書によれば、本絵巻は「杉原盛安」なる人物の発願により、絵師「市川権右衛門光重」が絵を描き、九条幸家・二条康道・遍照院良淳による寄合書の詞書を伴って、明暦元年（一六五五）に完成したと解される。「桐壺」は『源氏物語』五十四帖の巻頭を飾る帖であり、それがゆえに格別の思いを籠めて制作されたとみられ、本絵巻にのみ記された盛安の跋文は、^クの「源氏物語絵巻」の制作意図を解き明かす重要な鍵となる。

しかしながら、本絵巻に登場する杉原盛安・遍照院良淳の身分や経歴等については、不明な点が多い。また、詞書の分担も同時代の寄合書が絵巻であれば少なくとも一段分を堂上公家が書写するのに対し、本絵巻では三巻のうち、上巻の巻頭十五行を九条幸家、下巻の巻頭十七行を二条康道が、残りの大部分を経歴未詳の遍照院良淳が書いており、当時の寄合書の通例から外れている。

絵についても、奥書に「絵師 市川権右衛門光重」とあるものの、各図で表現の違いや巧拙が認められ、多くの手に分類できる。顔貌表現は本絵巻では四つのグループに大きく分けられるが、さらに細かい分類が可能で、他の帖とも共通する表現も見受けられる。

今回の発表では、奥書に記された本絵巻制作にかかわる基本情報をはじめ、絵の場面選択や画面描写を紹介するとともに、当時の源氏享受を

視野に入れながら、^クの「源氏物語絵巻」の制作に関わった詞書筆者や画家の多くが経歴未詳である点に注目し、制作背景について検討を行う。

「源氏物語絵巻 葵」（個人蔵）について

松岡知華

「源氏物語絵巻」の個人蔵「葵」六巻は、京都国立博物館に寄託されており、重要文化財指定の石山寺蔵「末摘花」一巻や、スベンサーコレクション蔵「帚木」一巻・「末摘花」二巻に連なる豪華絵巻として古くから知られながら、詳細な研究は行われてこなかった。近年、「賢木」断簡や「桐壺」三巻の発見によって、一連の絵巻の研究はおおいに進められた。本報告では、すでになされている先学の研究に導かれつつ、「葵」巻を中心に行ってきた考察の一端を提示する。

本絵巻には奥書や印章がなく詞書筆者は不明であるが、現在判明している他の巻の筆者とは別の二名が関わっていることが明らかである。構成は、詞書三十四段、絵三十三図からなり、「葵」帖の本文すべてが書写され、一節ごとに絵画化されている。場面数が多いため独自の場面が半数にもほり、源氏と源氏をとりまく人々の心情に添いながら展開している。なかでも死や身体的な表現など、これまでの源氏絵では視覚的に描出されることのなかった特異な場面や、プロットにおいて重要でない場面も含まれており、その意味について考える。さらに現状の検討により、逸失した画面の存在が想定され、その問題に関しても論究する。

絵画化においては、長大な画面に細部まで緻密な描き込みがほどこさ

れ、同型反復による場面展開もあるが、そこにも巧みな工夫が見られ、物語絵巻としてすぐれた演出力がうかがえる。また、画風には各場面によって差異が見られ、すでに指摘されているように、工房での場面ごとの分担制作と思われる。各帖の間における絵師の分担についても、若干の検討結果を提示する。本報告によって、一連の「源氏物語絵巻」解明の一助となるよう目指したい。

プリコラージュという観点からみた盛安本

エステル・レジェリー＝ポエール

「文学作品を一つのジャンルの中に入れるという作業はその作品に対する、我々読者としての「期待の地平」を決定づけて、結果として、その作品の理解も決定づける」とジェラル・ジュネットが『パランプセスト』の中で指摘している。『幻の源氏物語絵巻』が我々を驚かせるのは、正に、我々の「源氏絵」に対する期待の地平には対応していないからである。何回も指摘されてきたように、そのプロジェクトの大掛かりさ、徹底性への希望は、既存の源氏絵では認められないことである。加えて、本作品は奥書を持っている事も、世俗作品にしては、珍しい現象である。それらの特徴は、どこまで発注者の個性を反映しているか、というの、一つの大きな疑問である。

本発表では、先ず、本作品の発注者であろう盛安と繋がっている新資料を簡単に紹介する。その中で、盛安を九条家の家司として扱っているものもある。

次に、現在ばらばらになっている「賢木巻」の三十一枚の絵を、主と

して白黒写真（それを販売したギャラリーの図録）に基づいて、分析してみる。絵と本文の対応、さらに絵と絵の比較によって、「賢木巻」全体の絵画化の方針を探ってみる。その方針は次の関心によって導かれていることを明らかにする…1／光源氏の禁じられた、あるいは難しい恋愛関係（六条御息所、藤壺、朧月夜、朝顔）、2／東宮の運命に懸念を抱いている藤壺と光源氏（つまり、藤壺と光源氏が登場する場面は、恋愛関係と東宮に対する懸念の二種ある）、3／光源氏と右大臣の家族の対決と光源氏の没落への道筋。

分析の結果として、「賢木巻」の全体の構成は、それらのテーマによって、さらに絵と絵との間の一種の対話によって、統一されているのを明らかにする。

最後に、「賢木巻」の絵のソースという問題を提起する。三十一枚の絵の中の約三分の二は「源氏物語絵詞」あるいは山本春正の『絵入り源氏物語』の八場面選択の細分化／分割によっていることを明らかにして、「賢木巻」場面選択の独特性を相対化する。

近世初期の源氏学——九条家とその周縁の学問など——

海野圭介

源氏物語千年紀を機に関連資料の紹介が相継いだ、所謂「幻の源氏物語絵巻」は、その規模の大きさと相俟って成立環境にも多くの謎が残された作品である。現在確認されている巻々の巻尾には詞書の筆者名が記される例が多く、その人的構成から五撰家のひとつ九条家との関わりが注目され、また、桐壺（下巻）に付された跋文によって杉原盛安なる人

物のコピーネイトにより作成されたらしいことなどが知られている。当該作品に注目が集まるに従い、キーパーソンとしての盛安に関連する資料が博搜され、岩瀬文庫蔵『釈迦并観音縁起』などの絵巻や種々の典籍類が見出され、蔵書家としての側面が知られるとともに、その素性についても幾つかの興味深い指摘が示されている。

絵巻の制作とは聊か位相を異にするものの、委細未詳の人物とされた盛安は、実は水戸藩が『大日本史』の編纂にあたって設立した彰考館に蔵書の提供を行った人物として名が伝えられており、加えて彰考館側では盛安を九条家の家司として認識していたらしいことが記録されている。九条家側の記録では未だ同様の記事の確認ができておらず、盛安が実際に如何様な立場にあつたのかを窺うには更なる資料の追及が求められるが、典籍の書写奥書などによって現在までに知られている盛安の生存年間（天和二年 一六八二を下限とする）に隣接する時期に『大日本史』編纂のためにまとめられた『参考保元物語』に資料提供者として「九条殿家司杉原出雲守平盛安」とその名が見えることの信憑性は決して低いとは言えない。

盛安が九条家に繋がる立場の人物であったのならば、名の挙がる他の例についても改めて九条家との関わりは問われて良いように思われる。本報告では、従来検討が加えられることの多くはなかった九条家をめぐる近世初頭の『源氏物』を中心とした古典学に注目し、当該絵巻の制作環境の一端などについて考えてみたい。